眞州
和漢朗詠集
作者人
上

此朗詠集ハ　尊圓法親王御手跡の澄本と仮て本文を撰し
別書ふ精書して更ニ本文の詩とあらゝ表州二敷の字形と
異し別点の作者を詳ふ考ふる所本なり

真州頭書

和漢朗詠集

加点附

京摂書肆

稱觥堂
鬻書館

此書ハ一條院の御宇四条大納言公任卿の御作也和とハ我大御國の号漢ハ唐土の稱朗ハ清明透徹の義詠ハ詩歌ハ詠吟の事也我國ハ思を歌と詠ず唐土人ハ詩を賦して志を述詩と和哥と名ハ異なれども義ハ同ド此集ハ和漢賢才の人々の絶妙清朗なる詩歌を選集給へる故和漢朗詠集といふ　そのゆゑめ給へる詩歌ども殊ニ面白き秀

和漢朗詠集巻上目録

春

立春　早春　春興　春夜

子日　付若菜

三月尽　暮春　閑居三月　雪

落花　付桃花

柳　付櫻

梅　付櫻

鶯　付蛙

夏

逸のミうれゝの故往古
より催馬樂東哥みど
の如く此詩哥ゝ曲節
ど付て歌謳く〳〵人々
りそのそび傳へ〳〵也
今ゝ至ては童子素讀
れ入門とむる事都鄙
ゝゝとて習くせと
うれゝ故ゝ世間ゝ流
布せ本數板あれゝども
す多て文字の誤多く
其讀法もさまゝくゝて
一様うゝざれバ其是
非を辨へ難きゝ至れ
此本ハ尊圓親王御真
筆の證本と以て本文

更衣　首夏　夏夜　端午
納涼　晩夏　花橘　蓮
新蟬　螢　扇
秋
立秋　早稲　七夕　秋興
秋晩　秋夜　八月十五夜
九月九日付菊　九月尽　女郎花
萩　蘭　擣　砧衣

と撰一頭書ゝ楷書に
て夫々の詩と書顯一
真州二體の字形と諭
さしめ且右之證本ゝ
付たる訓點ゝ隨て讀
法を平ゝゝて記す
捨ゝゝ付讀等ハ本書
の間〳〵ゝかゝ交書す
助字ハ○と印とゝ讀
ざる字也再讀の字ハ
□と印とゝ上層の讀
法と本文の文字と上
下顛倒せるハ歸讀の
字也異ことゝ
郢曲歌謳と異成ハ本
文の傍へ序ゝゝ而記

紫付紫菫　雁付鴈　雲
秋露　霧　橋姫
冬
初冬　冬夜　巖暮　爐火
霜　雪　氷付玄氷　夏
仏名

和漢朗詠集巻上

四季之部

春

立春

吹と逐潛に開く芳菲の候を待不春を迎て年變ず將に雨露之恩を希と將

池の凍の東頭ハ風度て解寒の梅の北面ハ雪封ト て寒

柳氣力無して條先動

池ハ浪の文有て氷盡開

今日知不誰か計會せ

春風春水一時に来

春

立春

遷鶯潛開芳菲之候待不春迎年變將希雨露之恩　公乗億

池凍東頭風度解寒梅北面雪封　篤茂

柳氣力無條先動池有波文氷盡開　白居易

今日知誰計會春風春水一時来　古今白

夜残更に向て寒

磬盡春香火を生じて

曉露燃

早春

氷田地ハ消て蘆錐短

春枝條ハ入て柳眼低

先和風をして消息を

報ぜ遣續て啼鳥をして来由を說教

東岸西岸之柳遲速同

ち不南枝北枝之梅

開落已異

紫塵の嬰蕨人手を挙

碧玉の寒ハ蘆錐囊を

夜殘更向寒磬盡春生香火曉露燃　良峯春道

氷田地消蘆錐短春枝條入柳眼低　元稹

先遣和風報消息續教啼鳥說來由　中白

東岸西岸柳遲速同南枝北枝梅開落已異　慶保胤

紫塵嬰蕨人手挙碧玉寒蘆錐囊　野相公

脆を
氣霽て い風新柳の髪
と拂水消て い波舊苔
の鬚と洗
庭こ氣色と増バ晴沙
綠やう林小容輝と變
ぶれバ宿雪紅あり

春興

花の下にて歸ること
と忘るゝ い美景こ因
てゆう樽と前こ醉と
勸こい是春の風
野草芳菲とり紅錦の
地遊絲繚乱たり碧羅
の天

氣霽風流柳髮氷消波洗高岸須
岸壇氣色晴沙綠林容輝石紅
紀納言

岸とゝぐたるうしひの上けさゝしひの
うゝ出れまうなるふるれ
志賀の
望月

山風みゝくるおの山下ごゝて
うら出るる沼やまれうゝ
正泥

見わるゝぶゝ乃ゝ狂よゝ濃て
うゝ葉つむ爲ゝ野ハ緑ようゝ
紀貫之
中

春興

岸下に鶯囀ゝ勸酒是春風
白

野草芳菲地遊絲繚乱碧羅天
劉禹錫

歌酒い家家花い處處
空上陽の春と管領す
ること莫
山桃復野桃日紅錦之
幅と縣門柳復岸柳風
翠之絲と宛
野こ著てハ展敷く紅
錦繡天こ當てハ遊織
を碧羅綾
林中の花錦ハ時こ開
落す天外の遊絲ハ或
ハ有無たり
笙歌の夜の月家家の
思詩酒の春の風處處
の情
春夜

歌酒家〳〵花處〳〵空上陽春管領
莫
山桃復野桃日曝紅錦〳〵幅門柳復
紀齊名
岸柳風宛翠〳〵絲
美野展敷紅錦繡當天拂織遊織
野相公
林中花錦時〳〵開落天外遊絲或有無
田述音
笙歌夜月家〳〵思詩酒春風處〳〵情
菅三品
月夜の大空人ハいとゝあわれや楊ぐ〳〵て〳〵て〳〵て〳〵
まはるゝ花ぐもりのゆき人ゝ
赤人
忠岑

燭を背て共に憐深夜の月花を踏て同惜少年の春

子日　付若菜

松樹に倚て以腰を摩バ風霜之犯難こと必期す也

菜羹を和して口に啜れハ氣味之克調らんこと必期す也

松根に倚而腰を摩ハ千年之翠手に滿て梅花を折て頭に挿ハ二月之雪衣に落

付燭夜深深夜月踏花同惜少年春

白

その炎れ面こハ　いろ〳〵そえて　梅の花

付若菜　紀貫之

子日　付若菜

倚松樹以摩腰風霜之犯難和

菅丞相

菜羹を和して口に啜れハ氣味之克調

倚松根而摩腰千年之翠手に滿て梅

尊敬

花を折て頭に挿ハ二月之雪衣に落

子日　付若菜

ひなぞやそ代乃緑を摘さまし

佐

若菜

野中に芹菜世の推を忘れ仙徳中和養

菅

俗人に属して義を抱

人丸

赤人

貴之

春来て遍花花の不老仙源何處か

王維

三月三日　付桃花

春来てハ遍是桃花の水ながれハ　仙源と　辨不何の處とか尋ん

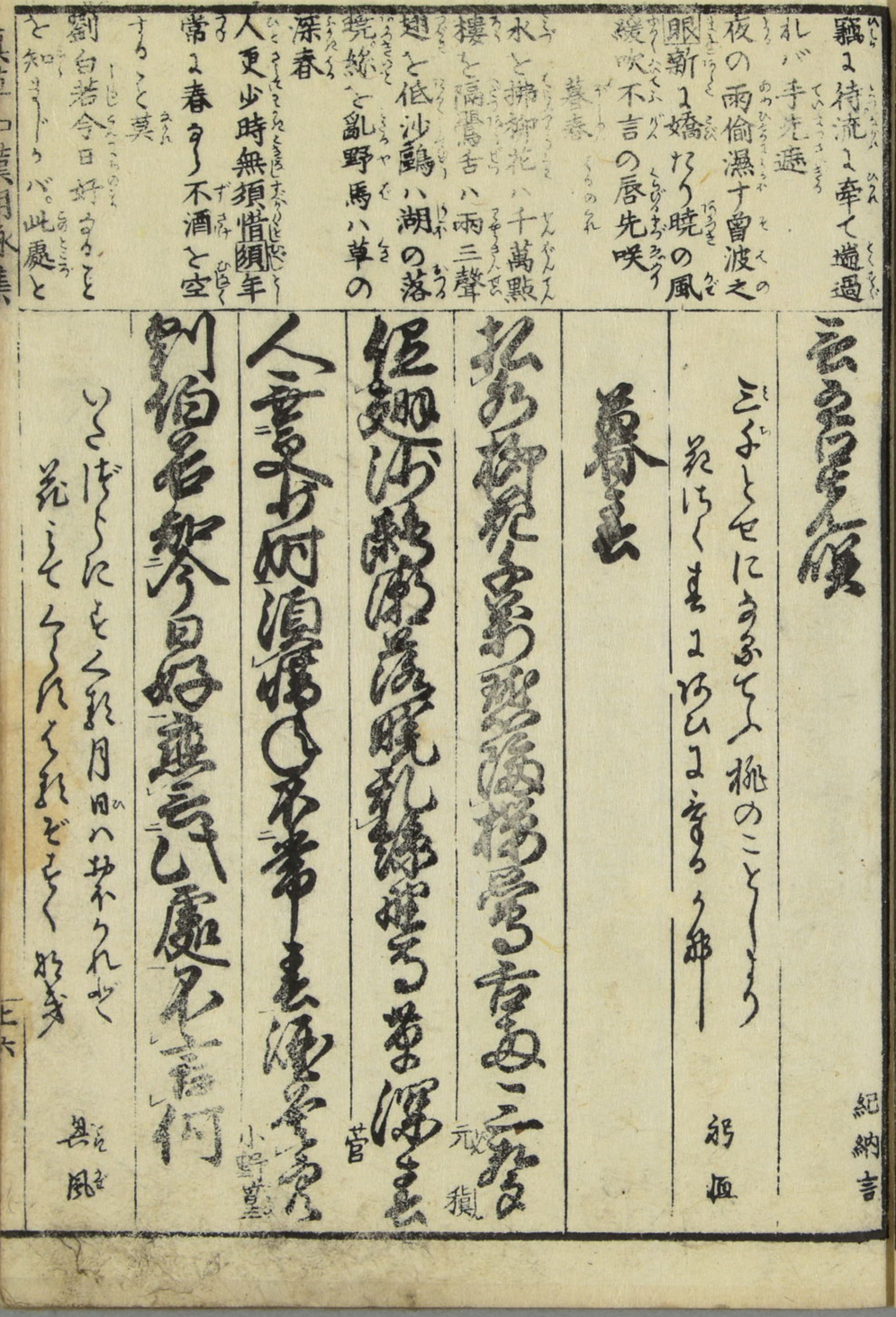
三月三日　付桃花

春来て遍花花の不老仙源何處か

春之暮月月之三朝天花と(手)醉り桃李盛なる也我君一日之澤万機之餘曲水遥すると雖遺塵絶たりと雖巴の字と書而地勢と知魏文を思て以風流と翫蓋志之所謹て小序と獻と尓云

烟霞の遠近同戸する應桃李の浅深勸盃似たり

水巴の字と成初三の日。源周年より起て後幾霜ぎ石と變れと遥來バ心



驪と待流と牽て遥過れバ手先遮

夜の雨倫濕す曾波之眼新と嬌たり曉の風幾吹不言の唇先咲

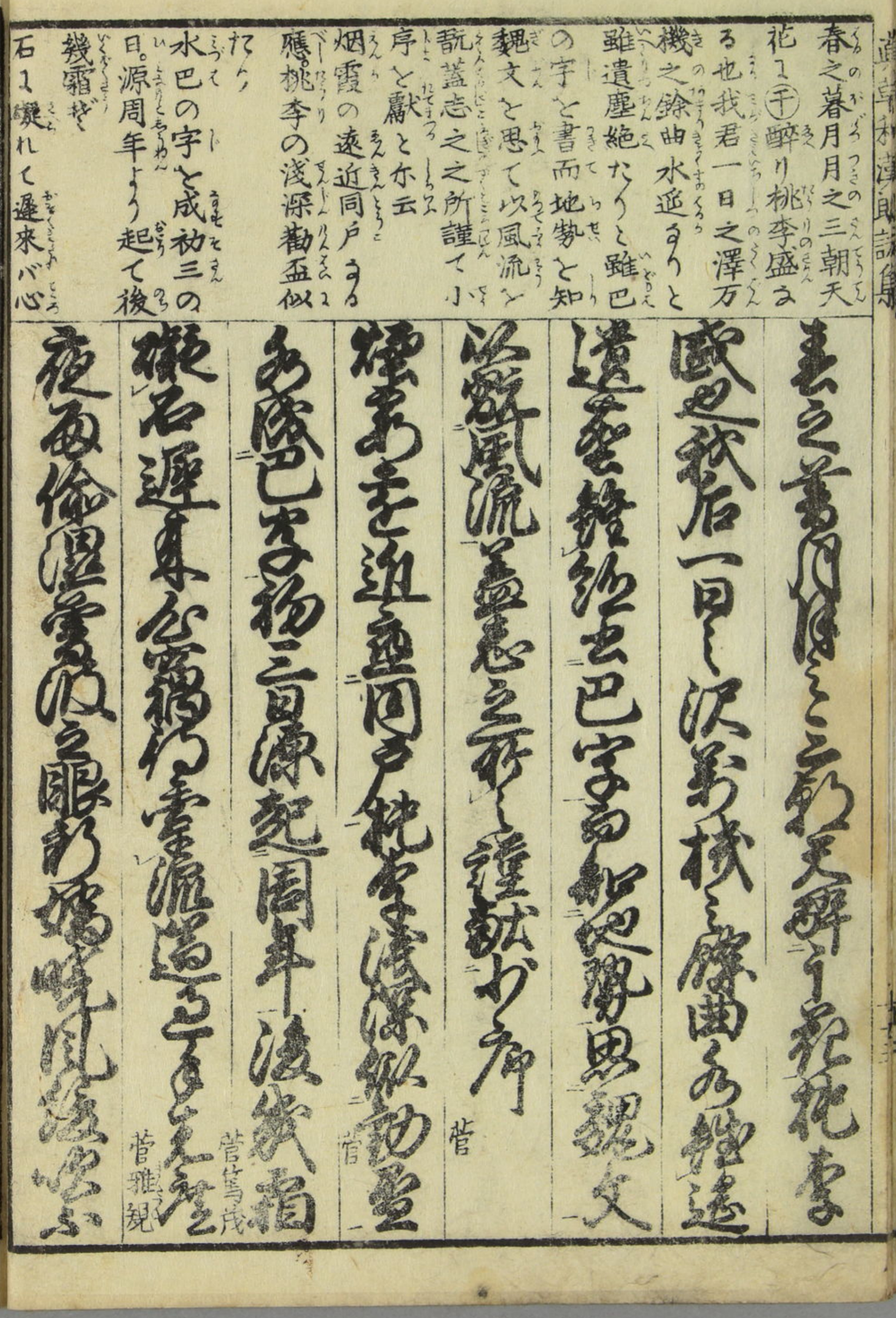
暮春

水と拂柳花ハ千萬點樓と高鶯舌ハ雨三聲

趣と低沙鷗ハ湖の落晓絲と亂野馬ハ草の深春

人更少時無須惜頭年常と春す不酒と空すること莫

劉白若今日好すると知ばバ。此處と



紀納言

三月三日

三月三日桃の花

花と(手)醉り桃李盛なる也我君一日之澤万機之餘曲水遥すると雖遺塵絶たりと雖巴の字と書而地勢と知魏文を思て以風流と翫蓋志之所謹て小序と獻と尓云

烟霞の遠近同戸する應桃李の浅深勸盃似たり

水巴の字と成初三の日。源周年より起て後幾霜ぎ石と變れと遥來バ心

紀納言

暮春

三月三日桃のことしもこそ花ちくまさるはるの春

紀恒

水と拂柳花ハ千萬點樓と高鶯舌ハ雨三聲

元稹

趣と低沙鷗ハ湖の落晓絲と亂野馬ハ草の深春

菅

人更少時無須惜頭年常と春す不酒と空すること莫

小野篁

劉白若今日好すると知ばバ。此處と

いさぎよくにをくれ月日のはやうれぬ

花ぞそくれぬるとく好き

菅原

ハ言應何とハ言不
三月盡

春を留めゝ春駐不春
歸て人寂寞たり風を
厭ゝ風定まら不風起
て花蕭索たり

竹院君閑ゝ一て永日
を銷し花亭ゝ我醉て
殘春を送

惆悵春歸留ゝを得不
紫藤花下漸黄昏たり
春を送ゝ舟車を動と
ゝ爪用不唯殘鬻を落
花與ゝ別

若韶光使我意知使バ
今宵旅宿詩の家在

三月尽

留まらぬ春帰人寂寞鶯風不
白
吹風起花蕭索

竹院君閑消永日銷詩送春
白
惆悵春帰留不得紫藤
白
花下漸黄昏

送春舟車唯別殘鶯与落花

若使韶光知我意今宵旅宿詩家在
菅
中
上
下二

留ゝ春ゝ駐ゝ春ゝ歸ゝ人ゝ寂ゝ寞ゝ風ゝ厭ゝ風ゝ定ゝ花ゝ蕭ゝ索ゝ竹ゝ院ゝ君ゝ閑ゝ消ゝ永ゝ日ゝ銷ゝ花ゝ亭ゝ殘ゝ春ゝ送ゝ惆ゝ悵ゝ春ゝ歸ゝ留ゝ紫ゝ藤ゝ花ゝ下ゝ漸ゝ黄ゝ昏ゝ舟ゝ車ゝ唯ゝ別ゝ殘ゝ鶯ゝ与ゝ落ゝ花ゝ若ゝ韶ゝ光ゝ知ゝ我ゝ意ゝ今ゝ宵ゝ旅ゝ宿ゝ詩ゝ家ゝ在

春留ゝ關城固ゝ用不
花落て風ゝ隨鳥雲入

閏三月

今年閏ハ春三月ゝ在
剩金陵一月の花を見
谿歸歌鬻更孤雲之路
ゝ枕逗留し林ゝ辭舞
蝶還一月之花ゝ翩翩
たり

花ハ根ゝ歸ゝを悔れ
とも悔ゝ益無鳥ハ谷
ゝ入ゝ爪期ゝ定て期を延

閏三月

今年閏三月剩金陵一月花
陸侍郎

歸谿歌鬻更孤雲路枕逗留林辭舞蝶還一月之花
源順

花根歸悔益無期定延
清原滋藤

人の心にあれやはせぬ

伊勢

鶯

鷄既に鳴忠臣旦を待
鶯未出未遺賢谷に在
誰家の碧樹より鶯鳴
而羅幕猶垂幾處花堂
より夢覺而珠簾未卷

未

霧唱山鶯啼こと尚少
砂穿蘆笋ハ葉纔に分
臺頭酒有て鶯客と呼
水面塵無して風池洗
鶯の聲に誘引せられ
て花下來草色拘留せ
られて水邊に坐を
同類於相求小感て離
鴻去雁之春の轉に應

賈島

元稹

謝觀

白

白

菅三品

菅三品

同句

異氣と會而終に混じ
龍吟魚躍之曉啼に伴
燕姫之袖暫收て繚乱
と於舊拍に精し周郎
之簪頻に動て間關と
於新花に顧る
新路ハ如今宿雪と穿
舊巢ハ後の為に春の
雲に屬す
西樓に月落て花の間
に曲中殿に燈殘て竹
裏の音

菅丞相

菅三品

素性

紫式部女御

中將

霞

霞

霞の光ハ曙て後火よ
ゝ(ゝ)殷草の色い晴
来て嬢と烟ゝ似たり
沙と鑚草ハ只三分許
樹ゝ跨霞ハ纔ゝ半眼
餘

雨

或ハ花の下ゝ垂とし
て潜ゝ墨子ゞ之悲と
増時ゝ聲の間ゝ舞て
暗ゝ潘郎ゞ之思を動
長樂の鐘の聲ハ花の
外ゝ盡ぬ龍池の柳の
色ハ雨の中ゝ深
教得ていハ自花の父母
為洗來ていハ寧藥の君
臣と辨んや
花の新ゝ開日初陽潤
鳥の老て歸時薄暮陰
ゆう
斜柳ハ暖風の先扇處
暗聲朝日の未晴程

梅

白片の落梅ハ澗水ゝ
浮黄梢の新柳ハ城墻
ゝ出たり
梅花ハ雪と帶て琴上飛
柳色ハ烟和して酒中入
漸薫臘雪新封すゝ裏
徇紀春風木扇未先

雨

きのゝを年ハ白ゝ春日の山ゝ色ゝ春ゝ　人丸
ゝ雲ゝそゝやハ花ゝ雨ゝ比ゝ山ゝ雲ゝ降ゝ　赤人
朝日ゝ照ゝれ乃ち雨山ゝ降ゝ雲の後ハ花ゝ色ゝ　色盛

白馬

鑚水若草三分計　樹雨洗青絲

菅丞相

或聲中聽雨江以言

初落時ゝ雨ゝ樹ゝ雲ゝ

李嶠

長樂鐘聲花外深　龍池柳色雨中深

月

月高ゝ夜海ゝ長ゝ春ゝ夜ゝ　紀淑言

長秋閑日獨傷心　菅二品

斜柳暖風先有恨　保胤

梅

梅ゝ月ゝ雨ゝ後ゝ春ゝ夜ゝ　行勢

白片落梅浮澗水　黄梢新柳出城墻

梅花第一雪飛琴　柳色和烟入酒中

章孝標

漸薫臘雪新封裏　徇紀春風未扇先

村上御製

五嶺蒼蒼として雲往
來但憐大庾萬株の梅
誰言春色東從到とハ
露暖して南枝花始開
青絲鬱出陶門の柳白
玉裝成庾嶺の梅

紅梅

梅ハ雖舌を含て紅氣
を兼たり江ハ瓊花を
弄して碧文を帯たり
淺紅嬋娟たり仙方の
雪色と媿濃香芬郁た
り妓鑪の烟薫と讓

五嶺蒼蒼として雲往來但憐大庾萬株梅　菅三品

誰言春色東從到　源重光

露暖して南枝花始開　石次内

青絲鬱出陶門柳白玉裝成庾嶺梅　後江相公　西園寺実氏

紅梅

梅含雖舌紅氣兼江弄瓊花碧文　元真

淺紅嬋娟仙方雪媿濃香芬郁妓鑪烟薫讓　橘正道

色有て分易殘雪の底
情無して辨難夕陽中
仙臼風生て空雪と散
野爐に火暖して未
烟と揚未

柳

林鶯ハ何の處ぞ等
の枉と吟墻柳ハ誰家
ぞ蜘塵と曝
漸他の騎馬ハ客と拂
と欲もんバ未多樓ぞ
上人を遮得困

巫女廟の花ハ粉似紅
昭君村の柳ハ眉於翠
○一説紅うして粉ぞ似たり

色有て分易殘雪の底　前中書王兼明

情無して辨難夕陽中　紀齊名

仙臼風生て空雪散　友則

野爐に火暖して未烟揚　花山院

柳

林鶯何處等程折柳誰家蜘蛛白

漸欲払他騎馬客未多樓上人白

巫女廟花似粉昭君村柳眉於翠

誠ニ知ぬ老去て風情
れ少と云此を見て
爭ふ一句の詩無らん
大庾嶺之梅ハ早落誰
う粉粧と問ん匡廬山
之杏ハ未開[未]豈紅艶
と趣[豆]

雲紅鏡と擎枝桑の日
春黄珠と嬭嬾柳の風
樹宅晴と迎て庭月暗
陸地日と逐て水烟深
潭心月泛で枝を交
る桂岸口ニ風来て葉
ニ混る蘋

微知老去風情少見折来春意一句詩
白
大庾嶺之梅早落誰問粉粧匡廬山
江相公
之杏未開豈怪紅艶
田達音
雲紅鏡擎枝桑日春黄珠嬭嬾柳風
樹宅晴迎庭月暗陸地日逐水烟深
後中書皇甫平
潭心月泛交枝桂岸風来混葉蘋
菅三品

青柳の糸よりかけ長しもづ
ゝ紅はかゝる花にかな
平之

めとやだのすゝ田にとりかる糸くれば
長の心ぞ長きまゝ
兼輔
中納言

花

花上莞ニ明ラ〻て輕
軒九陌之塵と馳猿空
山ニ叫て斜月千巖之
路と瑩
池の色ハ溶溶と〻て
藍水と染花ハ光ハ焰
焰と〻て火春と燒
逓ニ人家を見て花の
れば便入貴賤と親疎
與と論ぜ不
日ニ瑩風に瑩高低千
顆万顆の玉枝と染浪
と染表裏一入再入之紅
誰か謂水ニ心無と濃
艶ニ臨て波色と

花

花上莞ニ明ラ〻て輕軒九陌之塵と馳猿空山ニ叫て斜月千巖之路と瑩
張讀

池の色ハ溶溶と〻て藍水と染花ハ光ハ焰焰と〻て火春と燒
白

逓ニ人家を見て花のれば便入貴賤と親疎與と論ぜ不
白

日ニ瑩風に瑩高低千顆万顆の玉枝と染浪と染表裏一入再入之紅
菅三品

誰か謂水ニ心無と濃艶ニ臨て波色と

誰謂ー花語不ー輕濂激ーして号影唇ー動を
之ー水ー謂ー欲ーバ則漢女粉ー施之鏡清
瑩ー之ー花ー謂ー欲ーバ蜀人文ー濯之錦雰
織ーこと何の糸自唯暮の雨裁ーバ定ー
撲無春風ー任を花飛ー錦の如幾濃粧
織者ハ春風赤箱疊始識春風の機上ー巧
なること唯色ー織の
ー非芬芳ー織り眼ハ蜀郡ー貪裁殘錦

耳ハ紫城ー倦調畫筆

落花

落花語不空樹ー辞す
流水心無ーして自池入
朝ーハ落花ー蹈て相
伴て出暮ーハ飛鳥ー
随て一時ー歸
春の花ハ面面ー酣暢
之庭に闘入ナ曉の鶯
ハ聲聲ー講誦之座ー
豫參す異曉作晩
落花狼籍ー風狂ー
て後啼鳥龍鐘ー雨
の打時
閣ー離ー鳳の翔ハ擂
ー憑て舞樓ー下娃の

欲謂之ー則源女粉ー施之鏡清瑩ー之ー花ー謂ー欲ーバ蜀人文ー濯之錦雰織ーこと何の糸自唯暮の雨裁ーバ定ー撲無春風ー任を花飛ー錦の如幾濃粧織者ハ春風赤箱疊始識春風の機上ー巧なること唯色ー織の眼ハ蜀郡ー貪裁殘錦

源英明

菅三品

順

源相規

業平

紀順

ーこのゆにたて桜のこゝろ長春の心ハのゝけものゝ中ー

我者の花見ぐそにる人ハちゝ女人のちぞ恋ーかゝる春ー

落花

落花不ー飛空樹ー流水自入花
朝朝落花相伴出暮暮花鳥一何歸
之花面々闘入酣暢之庭曉暮啼
離閣鳳翔擂樓下娃神鳳沈鏡
落葉狼籍風狂後啼鳥龍鐘雨打何

白

白

白

後江相公

貞

袖ハ階と顧て翻る
躑躅
晩菜尚開紅躑躅秋の
房始て結白芙蓉
夜遊の人ハ尋来て把
と欲す寒食の家ハ
折得て驚應

歎冬
雌黄と點著して天ハ
意有歎冬誤て暮春の
風ハ綻
書窓ハ巻有て相收拾
す詔紙ハ文無して未
奉行せ末

さてちる木のもとにはさむしでそ手ふれぬ君をこそ
ゐとゆのそりめやつと心ちべこのをぶかあさたちあすれ　鄭之公忠

躑躅

晩菜尚開紅躑躅秋房初結白芙蓉　白

夜遊人歎寒食家折得驚應　順

れりひ出るそたくの山のいくまとし　平貞文

歎冬

雌黄點著唯英天有意誤冬渓綻暮春風

出窓有巻收拾詔紙無文未奉行　保胤

清慎公

藤

慈恩ハ悵望して三月
盡ぬ紫藤の花落て鳥
関関なく
紫茸ハ偏ハ朱の衣ハ
色と棄應ハ是花の心
憲臺と忘する應
紫藤の露ハ底殘花の
色翠竹の烟ハ中ハ暮
鳥の聲

夏

更衣ころもか
壁ハ昔々紅燈ハ宿と
經燈と殘し箱と開る
衣ハ年と隔る香と帶
ける

紙者のやまの山吹ひくぶちのそこうえまのうさこに　原見玉

藤

盛

源相規

縄孔

賀之

白

田子の浦のそこなく白波ときしてゆくえ人のあ
とにはなる松のなくてに浦ハ盛もかれる友の候て古うれ

夏　更衣

背ハ殘紅有猶開殘衣帯濃々香　白

生衣ハ家人と待て著
ひと欲す宿醸ハ當邑
老を招て酬ふる圖

首夏

甕の頭れ竹葉ハ春を
經て熟し階の底れ薔
薇ハ夏ゝ入て開
苔石面ゝ生して輕衣
短し荷ハ池心より出
て小蓋疎なり

夏夜

風拂ハ水を吹ハ晴天の
雨月平沙を照せバ夏
の夜の霜

生衣欲待家人来當邑老亮酬

花のあにそあしき祝のさしきれバ
ころもゝえうきそこにもまそれ

白 之

首夏

甕頭竹葉経春熟階底薔薇入夏開

苔石面生輕衣短荷出池心小蓋疎

物部安眞 順

夏夜

風拂水吹晴天雨月照平沙夏夜霜

風竹ゝ生夜窓の間ゝ
月ゝ月松を照時ゝ
臺の上ゝ行

空夜窓閉ゝ螢度て
後深更軒白し月ハ明
ゝる初

端午

時有て戸ゝ當て身を
危して立意無して故
園脚ゝ任て行

納涼ゝ

風竹生夜窓間月照松河臺上行

空夜窓閉螢度後深更軒白月明初

紀納言

裏の夜を行ぬにのはとらひ至し人ハあとをおりてさうん 人丸

やとぎれうやさきのゝ教もひとりしぬれバ行ゝ夕にも 月

夏の夜のつもりとすれバかとときれうゝ一ゝ来ゝ行ゝ乱ゝ之の之 中之

端午

菅

有河當戸危少之三五喜故園月拂初

あやめとてにのひるのやまあひとうれゝやはるうんん 頼基

きのすでよりやうゝ三八ゝ行やゝ家ゝ人ゝ我ゝ和の法ゝ之ゝ之ゝ 頼宣

納涼

青苔の地上に殘雨を消し緑樹の陰の前に晩涼を逐

露草清螢〳〵して夜を迎て滑き風襟蕭灑〳〵て秋に先て涼

是禪房に熱の到こと無しハ不但能心靜なるハ即身も涼

班婕妤が團雪之扇岸風に代(号)長忘燕の昭王招涼之珠沙月に當(号)自得たり

卧てハ新圖臨水の障と見行てハ古集納涼の詩を吟ず

青苔の地上に殘雨を消し緑樹の陰の前に晩涼を逐 白

露草清螢〳〵して夜を迎て滑き風襟蕭灑〳〵て秋に先て涼 白

不是禪房熱到無能心靜即身涼 白

班婕妤團雪扇代岸風忘燕昭王招涼珠沙月當自得

卧見新圖臨水障行吟古集納涼詩 菅後英明

池冷て水に三伏夏松高して風に一聲の秋有

池冷水三伏夏松高風一聲秋 大江匡衡

池冷て水に三伏の夏松高して風に一聲の秋有

晩夏

幽谷に水音ありて秋を待不

幽谷有水音待秋不

花橘

盧橘子低て山雨重枾擱葉戰て水風涼し

枝に小金鈴と繫春雨

葉後花ハ紫麝と薫す

飄風の程

蓮

まれなげのいくあのあ紙びあけく

夏なかなきやしとおもひるうれ

夏歌

晩夏

夏の庵と秋のろ〳〵表といづこ〳〵ろ紙に人とおもふ

紙にしもきうでおう名紙たる人ハ名ゆ〳〵と人ハ〳〵ろり

秋歌

中務

花橘

盧橘子低山雨重枾擱葉戰水風涼

白

枝金鈴繫春雨後花紫麝薫飄風程

佐中書田

丹之

かくきん金橘の香ハそうくハひゝ〳〵人や恋しき

さつきまれ花橘の香とうげバひゝ〳〵の人ハ世の香をする

伊勢

蓮

風荷の老葉ハ蕭條として緑あり水蓼が残花ハ寂寞として紅あり　白

葉展てハ影翻砌に當月花開てハ香散簾に入風　白

烟翠扇を開清風に暁水紅衣を泛白露の秋　許渾

岸竹枝低る鳥の宿應潭荷葉の動是魚遊　紀在昌

何に縁ゝ更に呉山の曲を覔む便是吾君に座下の花　延喜御製

經にハ題目為佛にハ眼為知ぬ汝が花の中に善根を植ことと　源為憲

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかハ露を玉とあざむく　良僧正

郭公

一聲の山鳥曙雲の外萬點れ水螢秋草乃中　許渾

さつきやみおぼつかなきをほとゝぎすなくなる聲のいとゞはるけさ　明日香皇子

ゆきやらで山路くらしつほとゝぎす今一こゑのきかまほしさに　公忠

さよふけてね覚ざりせバほとゝぎす人づてにこそきくべかりけれ　忠見

螢

螢火乱飛で秋已に近辰星早没て夜初て長　元稹

蒹葭水暗して螢夜を知楊柳風高して雁に秋を送　許渾

明明として仍在誰か月光を屋上㊇追人皓皓として消不豈雪片と床頭㊇積へ

記

一 磨剃刀　二丁
一 黒剃刀　二丁
一 二寸鋏　二丁
一 寸鋏　壱丁
一 五寸五分鋏　草木鋏　壱丁
一 草花鋏　壱丁
一 すんこ刃鋏　壱丁
一 指菜庖丁　弐丁
一 壱寸五分鑿　弐丁
一 壱寸二分鑿　弐丁
一 壱寸八分鑿　弐丁

右者御注文通差上申候
御受取可被下候

越前府中
桜井　喜三郎
富　岡

山經の卷乃裏ニ岫と過ちと疑海賦の篇れ中ニハ流ニ宿るに似ル

蟬

遲遲㊀春の日ニ玉の琴聴こ㊁風永溢嬰嬰㊂秋の風ニ山れ蟬鳴㊃宮樹紅ル千峯の鳥れ路ハ梅雨と舍五月の蟬の聲ハ麥秋と送鳥綠蕪ニ下て秦苑静ル蟬黄葉ニ鳴て漢宮秋ル

橘直韓

紀納言

積雪序花源

山經卷裏遥岫海賦篇中響流

蟬

遲々ち春日蟬聲ハ温泉酒姿ち

白

秋風山蟬鳴ち宮樹紅

李喜祐

春鳥鶯倉梅雨ハ蟬聲ハ麥秋送

中納言

鳥下綠蕪春秋詩蟬聲黄葉秋風

今年ハ例ル遲ル蟬れ悲のミニ不客の意も悲ル歳去歳来て聽ども變不言こと莫秋の後ニ遂ニ空と為と

紀納言

人丸

大納言

元

今年ハ例ル遲ル蟬れ悲のミニ不客の意も悲ル歳去歳来て聽ども變不言こと莫秋の後ニ遂ニ空と為と

菅

扇

盛夏にも消不雪終年ニも盡こと無風秋と引て手裏ニ生ず月と藏して懐中ニ入期せ不夜漏の初て分て後唯翫秋風未到ル前

紀納言

人丸

大納言

元

扇

盛夏にも消不雪終年ニも盡こと無風秋と

白

引て手裏ニ生ず月と藏して懐中ニ入

菅三品

期せ不夜漏の初て分て後唯翫秋風未到ル前

中務

元輔

秋

立秋

蕭颯として涼風と裏髮
與誰か計會教一時に
秋ぞ教

鷄漸散する間秋色少
鯉が當る趣處晩聲
微うし

早秋

但喜暑の三伏に隨て
去こと代知不秋の二
毛と送来こと
梶花雨に濕新秋の地
桐葉風涼して夜ぞ
んと欲する天

炎景剗殘て衣尚重晩
涼潛に到て簟先知

七夕

憶得たり少年長乞巧
するに代竹竿頭上に
顧総多

二星適逢て未別緒依
依之恨と叙末に五夜
將に明うんと將頻に
驚涼風颯颯の聲
露は別の涙うる應珠
空しく落雲は是殘粧
の髻未成末
風は昨夜從聲彌怨露
は明朝に及で涙禁せ
不

君がよにまうる秋の風ふれば
なびうきもあしどとぞ思

中務

秋　立秋

蕭颯涼風蕭蕭雅教計會一時秋
白

鷄漸散同秋色少鯉常趣處晩聲微
保胤　越州　紀納言

秋ぞと月こそ思へさやうにく　ねぐも風のあしたをおどろかれわ
うつれば梶の葉　きこのもとの秋のけしきをうしやうべ
紀納言

早秋

但喜暑遊三伏去不知秋已三毛來
白

梶花雨濕新秋地桐葉風涼欲夜天
白

炎景剗殘衣尚重晩涼潛到簟先知
紀納言

秋立ていくしあ〜ねどこのよわる
あさきの風はたのしすぐしも
安貴王

七夕

憶得少年乞巧竹竿頭上顧總多
白

二星逢逢別緒依依恨五夜將明
小野義材

驚涼風颯颯聲露は別の涙珠空
菅

風は昨夜從聲彌怨露は明朝に及で涙禁せず
後江相公

去衣恨と曳て霞濕應
行燭流と浸して月消
うんと欲す
詞ハ微波と託て旦遣
と雖心ハ片月と期し
て媒と為と欲を

秋興

林間と酒と煖て紅葉
と燒石上と詩と題し
て緑苔と拂
楚思森茫々として雲水
冷商聲清脆々として管
絃秋うう
大底四時心総苦中就
腸斷うる是秋の天

去衣恨浸霞無濕以燭浸流月欲消
詞譜微波託旦遣意期片月欲為媒
（菅輔昭）
人丸

秋興

林間酒煖紅葉石題詩拂綠苔
（白）
楚思森茫雲水冷商聲清脆管絃秋
（白）
大底四時心総苦中獨以是秋天
（白）

物の色ハ自容の意と傷
しむると堪ざる宜し
愁字將て秋の心と作宜
由来思と感ぜしむる
こハ秋の天と在多ハ當
時の節物と牽被たり
第一心傷しむると何
の處最なる竹風葉と
鳴して月の明なる前
蜀茶漸浮花味忘たり
楚練新と雪擣聲と傳

秋晩

相思て夕と松壺と上て立
ハ蛍思蟬聲耳と滿る秋
山望ハ幽月猶影と減
砌と叮飛蟲聲と倍

物以自然傷傷客意宜將愁字作秋心
（中野相公上下）
中夜感思生秋心多被當前物牽
（田達音）
第一傷心何處宜竹風鳴葉月明前
（同上）
蜀茶漸浮花味忘楚練新雪擣聲傳
（江相公）
うづまきのこれの重れ秋くだと学人ぐもうつ々ようの邨
（丹後忠人）
秋ハ自然のまづれ物なぐ一れおぎのく八風くだのたた
（義孝少将）

秋晩

桐葉と秋色至蛩蟲聲清耳秋
（白）
望山幽月猶影減砌虫聲倍傳

秋夜

秋の夜長夜長して眠こと無まバ天も明不耿耿〻〻殘燈壁ニ背影蕭蕭たる暗雨窓ニ打聲

遲遲たる鐘漏の初て長夜耿耿たる星河曙るかと欲する天燕子樓中霜月夜秋來只一人為ニ長

蔓草露深人定て後終宵雲盡ぬ月の明る前

燕鼓洲の裏孤舟の夢榆柳營の頭萬里の心

小ぐ〻山ぬしとの所をの花すき
小のうに尺ゆゑ秋乃夕今を　世之

秋夜

燈殘七〻ニ眠て耿〻〻殘燈背ニ

白

耿耿〻〻殘燈打聲

白

遲〻たる鐘漏の初て長夜耿〻〻星河曙るかと

白

燕子樓中霜月夜秋來只一人為ニ長

白

蔓草露深人定て後終宵雲盡ぬ月の明る

野相公

前

燕鼓洲の裏孤舟の夢榆柳營の頭萬里の心

紀齊名

八月十五夜

秋旬之一千餘里凍凍
氷鋪漢家之三十
六宮澄澄て粉と飾
錦と織機の中ニ已に
相思之字を辨衣と擣
砧の上ニ俄ニ悉別之
聲と添
三五夜中の新月の色
二千里外故人乃心
嵩山表裏千重の雪洛
水高低兩顆の珠
十二廻の中ニ此夕之
好ると勝ハ無千万
里の外各吾家之光
と爭

足曳の山ぬしとの所をの花すき
小のうに尺ゆゑ秋乃夕今を　世之

人丸

秋の夜長夜長して眠こと無まバ天も明不

彩頓

八月十五夜

白

秋旬之一千餘里凍凍

公乘億

氷鋪漢家之三十六宮澄澄て粉と飾

織錦機中ニ已に相思之字を辨衣と擣砧の上ニ俄ニ悉別之聲と添

白

三五夜中の新月の色二千里外故人乃心

同上

嵩山表裏千重の雪洛水高低兩顆の珠

白

十二廻の中ニ此夕之好ると勝ハ無千万里の外各吾家之光と爭

白

一筆[illegible]上候、然者[illegible]
御[illegible]之[illegible]御[illegible]様
[illegible]
目出度[illegible]御[illegible]
存[illegible]
[illegible]御[illegible]
[illegible]
猶[illegible]
早〻以上

碧浪金波三五の初秋
風計會して空虛なる
を似へり
自疑荷葉は霜と凝る
も早くもうらく人は蕣顏
花雨と過て餘のうつ
浮白しそ還て迷松上
の鶴潭蕊笑可藻中の
魚
瑤池は便是尋常の号
なり此夜の清明は玉
も如不
金膏は一滴の秋風に
露玉匣は三更の冷漢に雲
揚貴妃歸て唐帝の思
夢夫人去て漢皇に情

十二月中旬藤原朝臣
各皆手に花を
紀納言
落て金波三五の秋風に
菅原淳茂
自疑荷葉霜と凝る
同下タ
月白逢て迷松上
同下タ
落て便是尋常の
辰下タ
金膏一滴秋風
菅三品
楊貴妃歸唐帝
源ノ順

誰の人か隴外に久く
征戎なること何の處か
庭前に新に別離なる
秋の水漲来て船の去
と遠かり夜は雲收
盡て月の行こと遲
黙中酔不んば爭か去
こ〻に得麻園山の月正
に蒼蒼たり
天山には雖不何の年か雪
含浦には迷應舊日珠
豐嶺の鐘は聲と和せ
んと欲るや否其華
亭の鶴は警と奈何
卿淚數行征戎の客掉

水の面にて月を紙に入れ
今為ぐ秋は中なりけり
順

月

征人遠外久征戎何處か庭前新に別
白
秋の漲来船去
郢展
月辺雖不何の年か雪含浦
白
天山不何の年か雪含浦
三位重下
欲和豐嶺鐘聲
前中書王
月漲秋水掉歌一曲
保胤

歌一曲釣漁の翁

九月九日

燕へ社日と知て巣を辭して去菊は重陽の為に雨と冒て開

故事於漢武に採べ則赤斐宮人之衣に掛り舊邸於魏文に尋れば亦黄花彭祖之術と助三遷に先て其花を吹べ曉の星は河漢に轉ぐらが如十分と引号其彩を蕩せば秋の雪の洛川を廻ると疑俗本に秋の雲と有是い誤り

仲遠

九月九日　付菊

燕知社日旅巣去菊向重陽籬畔開

皇甫冉

採故宮於漢武尋赤斐採宮人之衣

紀納言

尋四皓於魏文助彭祖之術

先三遷而吹其花

河洛

三十分号為落川

同

谷水花と洗て下流を汲而上壽を得たる者三十餘家地脉に味を和す日精を飡而年頽と駐たる者五百箇歳

菊

霜蓬の老鬢は三分白露菊は新花は一半黄是花の中に偏に菊を愛するに不此花開て後更に花無なれば嵐陰暮春と欲して松栢之後に凋こゝに契秋景早移て芝蘭之先敗こゝに朝鄙縣の村間は皆屋潤

谷水洗出汲流而上壽得者

地脉和味飡日精而駐顔三百年

同上

わがやどのきくはいく代ぬるとかは

元稹

菊

霜蓬老鬢三分白露菊新花半黄

白

元稹

嵐陰暮春松栢後凋秋景早

紀納言

移芝蘭之先敗

陶家の兒子ハ垂堂不
蘭苑ニハ自俗骨為こ
と公魁撞離ニハ長生
有り公信せ不
蘭蕙苑の嵐紫と摧て
後蓬萊洞の月は霜と
照中

九月盡　あるの元

縱晴函と以て固と為
とも蕭瑟雲衢ニ留
難縱孟賁と而追令と
も何爽籟風境ニ遮
頭目ハ縱禪客の乞ニ
隨とも秋と以て施與
せんこと太難ケ應

文筆ニ轉と按白駒の
景詞海ニ舟と艤す紅
樂の聲

女郎花

花の色ハ蕊粟の如俗
呼て女郎と名と聞
戲に偕老と契と欲れ
ハ恐ハ衰翁の首の霜
ニ似ること惡

萩

曉の露ニ鹿鳴て花始
て發百般攀折一時の
情

郡縣村圃屋陶門屋
蘭苑自俗骨為こ
と公魁撞離ニハ長生
有り公信せ不
蘭蕙苑の嵐紫と摧て
後蓬萊洞の月は霜と
照中

三善清行

九月盡

縱晴函為固雖留難縱孟賁而追何

順

何爽籟風境遮頭目縱禪客乞隨秋為

順

文筆轉白駒景詞海艤紅樂聲

以言

女郎花

花色蕊粟如俗呼女郎名聞戲偕老契欲恐衰翁首霜似惡

千里

萩

曉露鹿鳴花始發百般攀折一時情

清樹

良峯

蘭

前頭之に更蕭條たる
物有老菊衰蘭三両叢
扶桑豈影無乎浮雲掩
而忽之昏最蘭豈芳ら
ら不乎秋風吹而先敗
凝い漢女の顔之粉と
施せるが如滴てい鮫人
の眼之珠と泣之似う
曲驚て楚客秋の紋襲
夢斷てい燕姫が曉の
衣之薫

秋の花はそれぞれ秋のこころはあるものなれどそれぞれ
にのこりなんとだに思ひき秋くれにわもるぶるもとる秋
秋ゆくと花の中にぞ思ひわびぬ花の香ばかりとしをしる　人丸
仲勢
久楠

蘭

前頭之に更蕭條たる物有老菊衰蘭三叢　白
扶桑豈影無乎浮雲掩而忽之昏最蘭豈芳ら不乎秋風吹而先敗　前中書王
凝い漢女の顔之粉と施せるが如滴てい鮫人の眼之珠と泣之似う　都良香
曲驚て楚客秋の紋襲夢斷てい燕姫が曉の衣之薫　直幹

槿

松樹千年終之是朽也
槿花一日自榮と為
来而雖隴之留不晨と
拂之豈有去而相顧之
返不暮之投之花無

前栽

多花と栽て目と悦ー
むる儔と見べ時之先
て豫養て開と待て遊
吾閑寂こーて家僮の
倦自春の樹い春栽秋
の草い秋栽

槿

松樹千年終之是朽也槿花一日自榮　白
来而雖隴之留不晨拂之豈有去而相顧之返不暮之投之花無　前中書王

前栽

多花と栽て目と悦ーむる儔と見べ時之先て豫養て開と待て遊吾閑寂こーて家僮の倦自春の樹い春栽秋の草い秋栽　菅三品

閑ニ汝が花の紅すん日と者ことと思ハ正ニ是吾賢の白らん年ニ當まろ

曾て種處ニ元亮と思ニ非是花の時世尊ニ供ぜんが為ろ

紅葉

甚不紅葉青苔の地又是涼風暮雨の天

黄纈纈ゝ林寒して葉有碧瑠璃の水浄して塵無　或ハ風無も有

洞中ニ清澄たる瑠璃の水庭上ニ蕭疎たる錦繡の林

自宮闕歸最佳秋樹千株秋葉紅　同

閑興看海花初日照高宮紫白年　伊賀

雪裏種處元亮為是花何似雪　菅上

ちくどんもくどもやさきれいりわるとと夏の花　紅梅　恒

紅葉　付落葉

不甚紅葉青苔地又是涼風暮雨天　白

黄纈纈林寒葉有碧瑠璃水浄塵無　白

洞中清澄瑠璃水庭上蕭疎錦繡林　保昌

外物の獨醒たるハ松間ハ色餘波の合カハ錦江の聲

落葉　とうで

三秋而宮漏正ニ長空階ニ雨滴万里而鄉園何ニ〻在落葉窓深秋の庭ニハ拂不藤杖ニ携る閑ニ梧桐の黄葉と蹈て行

城柳宮槐漫ニ揺落す秋の悲ハ貴人の心ニ到不

梧秋の影れ中ニ一聲之雨空濯鶴鳩の背れ

外物獨醒松間色餘波合カ錦江聲　必言

葉之雨空濯鶴鳩背　世之

ひゝく雨空ぬれもつてゝりるやりんきゝ葉のこゝばゆゝびゝ　清正

落葉

三秋而宮漏正長空階雨滴万里而鄉園何ニ在落葉窓深　秋賦

秋庭ニ掃携杖閑蹈梧桐黄葉行　白

城柳宮槐漫揺落秋悲貴人心　白

梧秋影中一聲雨空濯鶴鳩背上

上數片之紅纔ゝ殘
蕉蘇徙返ゝて扶朱買
臣之衣と穿隱逸優遊
す履葛推仙之藥と蹈
嵐ゝ隨落葉ハ蕭瑟を
含ミ石ゝ濺飛泉ハ雅
琴と弄ル
夜ハ遂て光多吳苑月
朝毎ゝ聲少漢林の風

順

高相如

順

後中書王

人九

雁

雁

雁

雁

萬里人南ゝ去ミ春鴈
北ゝ飛知不何の歲れ
月ハ汝與同歸ゝ得
潯陽の江ハ色潮添滿
彭蠡の秋聲鴈と引來
四五朶山の雨ゝ粧へる色
兩三行鴈ハ雲に點ずる秋

○異本ゝ雲に燃ずる聲とゝ

虛弓避難未疑於上絃
之月の懸ゝ拖末奔箭
迷易猶誤於下流之水
の急するゝ成
鴈碧落飛で青紙ゝ書
隼霜林と擊錦機と破
碧玉粧ゝセる筆の斜
ゝ立る粧青苔れ色紙

白

劉禹錫

杜荀鶴

後江相公

田達音

菅二品

數行の書

雲衣ハ范叔が羈中の贈りの風檣ハ瀟湘の浪の上の舟

歸鴈

山腰の歸鴈ハ斜に帯を牽水面の新虹ハ未巾を展ず

虫

切切たる暗窓の下喓喓たる深草の裏秋天思婦の心雨夜愁人の耳

或ハ愁人の耳とも

雲衣范叔羈中贈 風檣瀟湘浪上舟　後中書王

秋風にはつかりがねぞきこゆなる たがたまづさをかけてきつらん　友則

歸雁

山腰歸雁斜牽帯 水面新虹未展巾　都有中

はるがすみたつを見すてて行かりハ 花なき里にすミやならへる　伊勢

虫

切切暗窓下 喓喓深草裏 秋天思婦心 雨夜愁人耳　白

霜草枯むと欲虫思苦風枝未定困鳥の栖こと難

床にハ短脚にして蛬の聲の聞ゆ嫌壁に空しく鼠の穿を厭

山館の雨の時鳴ことおのづから暗野亭の風の處に織て猶寒し

義過に悠遠して風の聞晴壁底に吟幽にして月の色寒し

鹿

蒼苔路滑して僧寺歸紅葉聲乾て鹿林に在

暗萍食身色還變せ遷

霜草欲枯虫思苦 風枝未定鳥栖難　白

蛬聲聞於短脚床 鼠穴厭空嫌壁　野相公

山館雨時鳴自暗 野亭風處織猶寒　直幹

義過悠遠風聞 晴壁底吟幽月色寒　順

今こんといひてわかれしあしたより 秋の夜をあかしかねつる虫の音　よし人

きりぎりすいたくななきそ秋の夜の ながきおもひハわれぞまされる　忠房

鹿

蒼苔路滑僧寺歸 紅葉聲乾鹿林在　温庭筠

暗萍食身色還變遷　紀納言

更草加る穂風に隨来

露

懸可九月初三日夜露
ハ真珠に似月ハ弓に
似たり

露蘭叢に滴て寒玉白
風松葉を衝て雅琴清

○異本に衝でとあり

霧

竹霧ハ曉籠嶺に衝月
頻風暖に送江を過る
春　或ハ暗にともなう
夕霧ハ人枕を埋こと
と愁と雖猶朝雲の馬
鞭に出て愛す

ものゝ哀れとなれの山にすむ一人ぞとなれる秋とをもへ　旅宝

ゆふぐれよりのこゝろもとのすゑのくもゐの秋ハくるゝ　平之

露

懸月初三夜露仙主薄月似弓　白山

露滴蘭叢玉風衝松葉雅琴清　源英明

けさ一しのあさぢのつゆ
たまとみるまでとりもあへず

霧

竹霧曉籠嶺月頻風暖送江春　白

雖然夕霧埋人枕猶見朝雲出馬鞭　後江相公

擣衣　こうかとう

八月九月正に長き夜千聲
万聲了時無　異止時と有
北斗星前に旅鴈と横
南樓月下に寒衣に擣
擣處に曉聞月の冷
しと愁裁將ハ秋塞雲
の寒に寄
裁出て遥て長短の
製に迷ぬ遣愁ハ定て昔
の腰圍ハ不
風の底に香飛で双袖
舉月の前に折怨て兩
肩低に
年年の別思ハ秋の鴈
に驚夜夜の幽聲ハ曉

くぶたのこゝきこえぬるあきのいとのもゝぐのたちかたらん　友則

いなまくるのゝ中にぞ秋のこゑハうえりふ　深養父

擣衣

月夜長夜千聲万聲　白山

少年思舉月前折怨兩肩低　刺元叔

擣處曉聞月冷裁將秋塞雲　菅家茂

裁出遥迷遣愁定昔腰圍不　直幹

風底香飛双袖舉月前折怨兩肩低　後中書

別思秋鴈夜幽聲曉

の鶏に到

冬

初冬

十月江南天氣好なり憐可冬景春花に似たること（異）春に似て花と

四時零落して三分減萬物蹉跎して過半凋めり

床の上にハ巻収青竹の簟匣の中にハ開出す白綿の衣

冬夜

一盞の寒燈ハ雲外の夜数盃の温酎ハ雪中の春

かくしゆきうつりきけバ月きよみ
まずしらぬ人とそしにまかりける　貫之

冬

初冬

十月江南天氣好　可憐冬景似春華　白

四時零落三分減　萬物蹉跎過半凋　延喜御製

床上巻收青竹簟　匣中開出白綿衣　菅三品

神な月ふりみふらずみさだめなき
しぐれぞ冬のはじめなりける　貫之

冬夜

一盞寒燈雲外夜　數盃温酎雪中春　白

年光ハ自燈前に向て盡客思ハ唯枕上從生

歳暮

寒流月を帯て澄こと鏡の如し夕吹霜に和して利こと刀に似

風雲ハ人前に向て暮易歳月ハ老底從還難

爐火

黄醅の緑醑ハ冬を迎て熟す絳帳の紅爐ハ夜を逐て開

年光自向燈前盡　客思唯從枕上生　尊敬

おもひかねいもがりゆけば冬の夜の
川風さむみちどりなくなり　貫之

歳暮

寒流帯月澄如鏡　夕吹和霜利似刀　白

風雲易向人前暮　歳月難從老底還　良春道

ゆくとしのをしくもあるかなますかゞみ
みるかげさへにくれぬとおもへば　貫之

爐火

黄醅緑醑迎冬熟　絳帳紅爐逐夜開　白

看て野馬無聽て鬻無
臘裏の風光火て迎被
たり
此火ハ花の樹と鑽て
取るふ態對未終日春
の情有（裏）對采終夜とり
他時てハ縱鬻花の下
て醉ゝも近日てハ那
默炭の邊と離

霜

三秋の岸雪花初て白
一夜林霜葉盡紅ゝ
萬物ハ秋霜能色と壞
四時冬日最凋年ゝ
閨寒ーて夢驚或ハ孤
婦之砧の上て添山深

看て野馬無聽て鬻無臘裏風光火て迎被　菅三品

火を殘花樹に對て終日有二春情一　同

紙酒醉常花下逢日暮雞獸邊　輔昭

うづゝ火のもとにこぶれしとたとうも
かゝゆゝほのゝとうぎわびした　紫野

霜

三秋岸雪花初白一夜林霜葉盡紅　溢定場

萬物秋霜能壞色四時冬日最凋年　白

閨寒して夢驚或孤婦砧上山深感

して感動先四時（之）響
の邊と侵
君子夜深して聲皆不
老翁年晚て鬢相驚
聲聲已斷ぬ花亭に鶴
歩歩初て驚葛履の人
晨て瓦溝て積て鴛色
と變す夜華表て零て
鶴聲と春

紀納言

動先侵窓皓しく好賓客

君子夜深聲皆不　菅三品

老翁年晚鬢相驚

晨瓦溝鴛色初　菅三品

變夜華表鶴聲春　紀納言

ふるさとに春ぞくれてきけどさらぬ
ひもめくどもとやとゝん　人丸

雪

曉梁王之苑て入ハ雪
群山て滿て夜庾公（之）
樓て登ハ月千里に
明

雪

曉入梁王苑雪滿群山夜庾公樓月千里　謝觀

銀河沙漲三千界振嶺花開一万株

雪鵝毛似飛で散乱を人鶴氅と被立徘徊す或ハ風と逐て返不群鶴之毛孤振ゞ如亦晴ニ當て猶殘れり狐之腋と綴ゝと疑翅ハ群を得て似ゝ浦ニ栖鶴心ハ興ニ乘じて舟ニ掉さす人ニ応（異）心ハ興ニ乘ず應有庭上（校）立れハ頭ハ鶴為坐して爐邊ニ在ハ手亀不蛭女ゞ閨の中ハ秋の扇の色楚王の臺ハ上の夜ハ琴の聲

氷

氷水面ニ封じて聞ニ浪無雪抹頭ニ點じて見ニ花有

霜鶴唳と妨て寒して露無水狐疑と結で薄して氷有

春氷

氷消水と見べ地始多雪霽山と望べ盡摟入氷消て漢王覇と疑應雪盡て梁王牧と召不（異）牧或召不と有ハ誤

雪似鵝毛花開一万株　白

或風と逐て返不群　紀納言

沙疑狐腋　菅

翅群を得て似ゝ　村上御製

蛭女閨中秋扇色　尊敬

こゝにヨがづしとうるさんゆえと　源景明

〜けゝやヨはぬうゝやまねらん

氷

氷封水面閉雪漲高岸林頭見花有　菅

霜嫉唳妨寒露無氷狐疑為結氷　相如

七條后宮

雪盡梁王牧召不　白

氷消漢王覇疑　尊敬

胡塞ニハ誰カ能使節ト金ぜん虎陀ニハ還テ恐臣の忠ヲ失フ式

異 忠臣ヲ失フ式恐ヲ訓ズ

霰

麈牙米數テ聲聲脆ー龍頷珠ヲ投ゲテ顆顆寒

佛名

香火一爐の燈一盞白頭ヲ照テ夜禮ヲ佛名經香ハ禪心自火ヲ用ル

こ無花ハ合掌ニ開テ春ニ因不

胡塞誰能金使節虎陀還恐失忠臣

相規

やま川のこぎはまされる霜路ゆ

たのこりはかりやとくらん

霰

麈牙米數テ聲聲脆龍頷珠投顆顆寒

菅

ふやまたにハあられとやとるる

ちれのろぼしにろづきたまり

雲之

佛名

香火一爐燈一盞白頭夜禮佛名經

白

香自禪心用合掌開

菅原相

わ〜ふるのやまもびたるる

つゝものこるやしらん

雪盛

や〜はちにつくられる法ハ

ぬるもの〜ものもさきにきえなん

は

かぞへれをわが身につくと〜ぬと

とゝむりとなるよいやぶ〜業

雪之

和漢朗詠集卷之上終